



Title	ソ連=フィンランド戦争をめぐる史料・文献について : その研究史的覚書
Author(s)	百瀬, 宏; Momose, Hiroshi
Citation	スラヴ研究, 11, 103-121
Issue Date	1967
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4988
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112890.pdf



ソ連＝フィンランド戦争をめぐる史料・文献について

— その研究史的覚書 —

百 瀬 宏

は し が き

1939年11月30日から1940年3月13日にかけて行なわれた「ソ連＝フィンランド戦争」⁽¹⁾は、わが国では、ソ連外交の評価・第二次大戦の一局面としての「奇妙な戦争」(Drôle de guerre ; The Phony War)の解釈・小国中立論などとの関連において、多く論議の対象となりながら、しかも、それ自体としては、殆んど史的考察の対象とされることがなかった。それゆえに、上記の諸問題をめぐってわが国の論壇でしばしばたたかわされてきた論争も、ソ連＝フィンランド戦争そのものの史実の解明に立脚したものとは必ずしもいえない憾みがあった、と思われる。

もっとも、ソ連＝フィンランド戦争をめぐるこのようなある意味での論議の「過剰」と史実の解明「不足」という事態は、われわれ日本の研究者の怠慢にのみ、その責めを帰せられるべき問題ではなからう。一般に「現代史研究」と呼ばれるものにつきまとう困難さの特徴は、その研究テーマとするところが往々にして時の政治的イシューと直接にかかわったものである点にあり、それゆえに、そのテーマをめぐる論議やさらには関係史料の出現状況そのものが、高度に時の政治的状況を反映したものとなることが少なくない。しかも、その研究テーマが一国内に止まらず、数カ国にわたって政治問題であるような国際的な性格を持つものである時、事柄は一層複雑になる。ソ連＝フィンランド戦争は、まさにこのような好例ということができるのであろう。ソ連＝フィンランド戦争をいかに回顧するかは、まず、「巨大な隣人」(Suuremme naapuremme) ソ連邦との友好的共存を至上命令とするフィンランド国民にとって、死活の利害にかかわる問題であるというも、過言ではないであろう。次に、ソ連邦にとっては、それは、外政上においては独ソ戦争前史における国際環境とソ連外交の評価の問題と、そして、内政上においてはかの粛清事件を含むいわゆる「スターリン時代」の評価の問題と、恐らくつながっている筈である。そして最後に、英・仏またアメリカなどのいわゆる西欧諸国においては、ソ連＝フィンランド戦争観は、これら諸国民による対ソ認識の問題と切り離しては考えられなかったと思われる。

(1) この軍事紛争は、諸外国においては、Talvisota (フィン語)、Vinterkriget (スウェーデン語)、The Winter War (英語)などと呼ばれており、何れも「冬戦争」を意味する。フィンランドは、このうち、1941年6月に、ナチス＝ドイツの対ソ戦争に巻き込まれて再びソ連邦との戦争に入ったが、この方は「継続戦争」(Jatkosota — フィン語) (The Continuation War — 英語)と呼ばれるのが普通である。従って、「ソ連＝フィンランド戦争」は、第二次大戦中戦われたこの二つの戦争の総称を意味する筈であるが、本稿においては、わが国での通称に従い、「冬戦争」の意味で用いることとする。

このようにして、ソ連＝フィンランド戦争が各国の政治状況にたいして持つ意味が深刻であればある程、関係史料・文献の出現の仕方には、史実の安易な再構成を困難ならしめるものがあつた、と思われるのである。

そこで、もしわれわれが、ソ連＝フィンランド戦争に関して、現段階において一応満足しうるような史実の解明を期そうとするならば、その準備作業として、従来出現した史料・文献を、以上に触れた各国の問題状況の背景のもとに位置づけてみるのが、まず必要であらう。本稿の筆者は、かつて、他の機会にこのような作業の輪郭を提示したことがある⁽¹⁾が、その試みを拡大したものが本稿である。本稿の内容は二章に分れる。第一章においては、ソ連＝フィンランド戦争に関して従来各国で出現した基本史料を概観し、第二章においては、当該テーマに関してこれまで史家によって発表された研究文献を、ソ連邦・フィンランド・西欧諸国の各学界について紹介・検討し、このようにして、ソ連＝フィンランド戦争に関する研究状況のパノラマを描き出すことが目的である。ところで、ひと口にソ連＝フィンランド戦争を問題にするといっても、そこには二つの焦点が浮び上がってくるといえるであらう。一つは、ソ連＝フィンランド戦争の起源に関するものであって、そこでは、戦争に先立って行なわれた両国間の領土交換交渉におけるソ連邦側、フィンランド側それぞれの政策をいかに評価するかが、論議の中心とされてきたのである。今一つは、戦争勃発後に主として英・仏に生じたフィンランド援助軍派遣の動きであつて、それが第二次大戦の当時の段階において持った意味、およびそれに関するソ連邦・フィンランド両国の対応態度などが問題とされるのである。そして、前者はもっぱらソ連邦・フィンランド両国の問題であるのに対して、後者は、第二次大戦史また英仏自体の問題としても重要な意味をもつものである。しかも両者は相互に切り離しがたい論理的関連をもつが、本稿においては、さしあたり、前者の問題を中心にとりあげることとする。

1. 基本史料の出現状況

一般の通念に従えば、われわれが扱っているようなテーマの場合もっとも史料価値の高いものは、外交文書を含む関係各国の公刊文書集の筈であるが、この点については、われわれはあまり恵まれた状態にはない。

ソ連＝フィンランド戦争前史に関して、フィンランド政府が刊行した唯一の文書集は『フィンランド青白書』 *Suomen Sinivalkoinen Kirja I*, Helsinki, 1940 (これは各国語で刊行された。たとえば、英語版は、*Documents Concerning Finnish-Soviet Relations: The Development of Finnish-Soviet Relations During the Autumn of 1939 in the Light of Official Documents*. Helsinki, Ministry for Foreign Affairs of Finland, 1940. 仏語版は *Documents sur les relations finno-soviétiques — Automne 1939 — ; Publication du Ministère des Affaires Etrangères de Finlande*, Paris, 1940. である) である。これは、いわゆるカラー・ブックの性質をもつものであつて、フィンランド政府がソ

(1) 百瀬宏「ソ連＝フィンランド戦争の理解をめぐる——海外研究動向の紹介——」(国際関係論研究会『国際関係論研究』I, 1966年4月)

連邦側の非を世界に訴えたものであるが、戦争に先立つ領土交換交渉の過程で両国政府が取り交した覚書や、一部の会談内容についてのフィンランド側の記録がそこに含まれており、交渉経過の大体の輪郭を明らかにしている。しかし、『フィンランド青白書』はやはりカラー・ブックとしての限界をもつものであり、たとえば1938年春以来秘密裡にソ連邦とフィンランドの間に行なわれてきた接渉についてはまったく触れておらず、また1939年秋の交渉そのものについてすら、両国間の会談内容の細目すべてを明らかにしてはいないのである。しかも、フィンランド政府はこれ以後、このソ連＝フィンランド交渉に関して、また戦争勃発後の同国の対外関係に関しても、外交文書集の類を公刊してはいない。⁽¹⁾ところで、これにたいして、ソヴェト政府は、ソ連＝フィンランド戦争に関してはカラー・ブックの如きものすらまったく発表しておらず、また1957年以来刊行されつつあるソ連邦の対外政策文書集《Документы внешней политики СССР》もまだ当該時期には及んでいない。

紛争当事国での外交文書の出現状況が以上のようなものであるのにたいして、むしろ、ソ連＝フィンランド紛争にたいしていわば第三者の立場にあった国々の公刊文書集の中に、ソ連＝フィンランド交渉についての傍証的な史料が見出される。これらの中で、ドイツ外交文書集 *Documents on German Foreign Policy 1918-1945, From the Archives of the German Foreign Ministry. Series D., Vol. VIII: The War Years (1939-1940)* (Washington D.C., 1954)、アメリカ外交文書集 *Foreign Relations of the United States, Diplomatic Papers, 1939, Vol. I: General* (Washington D.C., 1956) が、とくに重要である。このうち、ドイツ外交文書集とアメリカ外交文書集は、ソ連＝フィンランド戦争勃発前のソ連＝フィンランド交渉に関する傍証的記録を含み、かつ、この問題にたいする独・米両国の態度を物語る史料を提供している。

政府公刊文書の出現状況は以上のようなものであるが、次に、ソ連＝フィンランド戦争に関する回顧録の類に目を転ずると、まず、第二次大戦後のフィンランドにおいて、数多い回顧録が現われている。いったい、フィンランドは、ソ連＝フィンランド戦争の終了後、1941年6月にナチス＝ドイツの対ソ戦争にまきこまれて、再びソ連邦との戦争 (Jatkosota; The Continuation War) に入り、1944年9月によりやく休戦の実現をみたのであるが、戦後になって、従来の、それもとくに第二次大戦中のフィンランド政府の対ソ政策を批判する風潮がつよくなった。そして、このような言論界の動きと並行して、第二次大戦直後から1950年代にかけて、大戦当時の対ソ関係に関する政治家や軍人の回顧録が、フィンランドにおいて続々と刊行されるにいたった。これらの回顧録の中で一つのグループとして扱うるものに、スウェーデン人党党员で国会議員であったフリーチュ C.O. Frietsch によって書かれた *Finlands ödesår* [フィンランドの運命] (Stockholm, 1946) と、同党幹部ボルン Ernst von Born によって書かれた *Levnadsminnen* (Helsingfors, 1954) がある。両者とも、大戦中のフィンランドの対ソ政策に対して明確に批判的であり、また、戦前のフィンランドにおける極右運動についても、かなり精しい記述がなされている。いっ

(1) フィンランド政府のアルヒーフは、50年を経過した文書についてのみ公開されることになっているため、当該テーマに関してはフィンランド側の外交文書に直接当ることは目下のところ不可能である。

たいこのスウェーデン人党とは、二国語制 (bilingualism) をとるフィンランドにおいて少数民族的な地位を占めてきたスウェーデン語使用住民を代表する政党であり、国語問題その他でしばしば特殊な利益を主張してきたのであるが、第二次大戦中においては、ソ連邦問題について、フィンランド人一般が示したような民族的感情の昂進から比較的免れており、政府の対ソ政策にたいして批判を行ない、フィンランドで行なわれた休戦運動の中で目立った動きを示していたのである。

ところで、これらのスウェーデン人党党員の回顧録が、フィンランドの対外政策決定機構の外部にあるか、あるいはその核心からやや離れた位置にあった人々によって書かれたものであるのにたいして、政策決定にかなり責任をもっていた人々によって書かれた回顧録が、1950年代になって、続々出るようになった。たとえば、ソ連＝フィンランド戦争前夜の対ソ交渉の際の特派使節の一人であり（当時は蔵相）、戦争勃発後は外相となったタンネル Väinä Tanner の *Olin ulkoministernä talvisodan aikana* [私は冬戦争当時外相だった] (Helsinki, 1951) および第二次大戦中フィンランド国防軍総司令官であったマンネル Heim Gustaf C. Mannerheim による *Minnen* [回顧録] (Helsingfors, 1952) がそれである。両回顧録は、フィンランド国外はもとより国内の人々にとっても、事情通の人々を除いてやや意外な印象を与えたのではないかと思われる。いったいタンネルは、フィンランド社会民主党の指導者として1918年のフィンランド内戦後の同党を共産主義勢力の影響から離脱させようと努力したことで知られており、第二次大戦後は戦争責任裁判の被告席に連なり、ソ連邦側からはソ連＝フィンランド交渉を挫折させた張本人と目されてきた。一方、マンネル Heim もまた、かれが内戦当時に白軍司令官であったことの記憶とともに、以後もフィンランド国防会議議長としてフィンランドの政治に隠然たる勢力をもつ反ソ的な反動軍人と見做されていた。しかし、かれらの回顧録が出版されると、そこではタンネルは、対ソ交渉中むしろかれ自身が同行者のパーシキヴィとともに、本国政府の硬直した態度にいかにか困却したかを述べており、またマンネル Heim は、フィンランドの貴族出身であり帝政ロシアの将官としての経歴をもつ自己の体験から、ソ連邦のフィンランドにたいする戦略上の要求を基本的には肯定し、むしろフィンランド政府がとった処置を近視眼的と批判しているのであった。

もっとも、戦後に出版されたフィンランドの政治家の回顧録は、以上のような性格のものばかりではない。ソ連＝フィンランド戦争当時国防大臣であったニウッカネン Juho Niukkanen の回顧録 *Försvarsminister under Vinterkriget* [冬戦争下の国防大臣] (Helsingfors, 1952) は、対ソ強硬論者の立場から書かれており、ソ連＝フィンランド戦争勃発後の時期についても、とくにタンネルの休戦工作をソ連邦にたいして妥協しすぎたものとして非難し、抗戦を継続すれば英仏の援助によって窮地を切りぬけられたはずであった、としている。フィンランドにおける回顧録の出現状況に関して惜しまれるのは、このニウッカネンのもの以外には、対ソ強硬論者のそれが余り見当らない点であろう。ことにソ連＝フィンランド戦争前夜の対ソ外交においてパーシキヴィ・マンネル Heim・タンネルらの和協論を退けて強硬論を貫徹した外相エルッコ Elias Erkkö やかれの立場に同調していた大統領カッリオ Kyösti Kallio、首相カヤンデル A. K. Cajander らの回顧録が存在

しない。もっとも、当時のかれらの言動は諸回顧録から比較的詳細に窺いうるどころであり、また強硬派の主張を代弁していた当時のフィンランド政府の立場を説明した文献が存在するので、強硬派の回顧録の欠如はある程度これらの史料によって補いうると思われる。その文献とは、John H. Wuorinen ed.: *Finland and World War II, 1939-1944* (New York, 1948) である。いったい、第二次大戦直後のフィンランドにあっては、大戦中の政府の対ソ政策の弁護論は公然とは語られにくい雰囲気があったといわれるが、この書物の草稿は、その内容の性質上フィンランド国内では出版が憚られ、米国に送られたうえ、フィンランド史の専門家ヴォリネンが解説を加えて編集出版したものである。この草稿の筆者はヴォリネンによれば、戦時中の政府当局に近い地位にあった人物であるとのことであり、学問的なモノグラフの体裁をとりながらも、全篇ことごとくフィンランド外交の弁護的説明が展開されているのである。

さて、ソ連＝フィンランド交渉時にタンネルと並んでソ連邦への特派使節を勤め、第二次大戦後は対ソ善隣外交を唱える大統領として登場した保守党領袖パーシキヴィ Juhon K. Paasikivi の回顧録 *Toimintani Moskovassa ja Suomessa 1939-41* [モスクワとフィンランドにおける私の活動], I (Helsinki, 1958) は、1958年になってようやく刊行されたが、その内容は少なくともソ連＝フィンランド交渉の部分についてはタンネルの回顧録の正しさを裏付けるとともに、全篇にわたって、パーシキヴィ自身の外交哲学とも呼ぶべきものが述べられている。それによれば、当時のフィンランド政府首脳、ことに外相エルッコらは、「平和主義的楽観論」(Fredsoptimismen) に拠っており、ためにソ連邦が自国の安全保障要求の貫徹を決意しているという現実政治の深刻さが見ぬけず、安易かつ無責任な対ソ強硬外交に身をゆだねたのである。このパーシキヴィの評価は、前記のマンネルヘイムのもとの軌を一にする。

以上のフィンランド側の諸回顧録は、いずれも、事件当時の著者の立場や体験をほぼ忠実に再現していると思われ、一般に信憑性の高いものと判断されるが、ことにタンネルおよびパーシキヴィのそれは当時の会議記録や外交文書また日記に依拠して詳細に事実を追っており、それらの長文にわたる再現も随所でなされていて、政府公文書の未公開の状態を、かなり埋めあわせていると考えられる。ところで、フィンランドにおける回顧録類の出現状況が以上のようなものであるのにたいして、ソ連側のこれらに対応するような回顧録はまったくない。ソ連＝フィンランド関係にかぎらず、ソ連邦の外交一般についても、従来回顧録の類は殆んど出版されておらず、わずかに元駐英大使マイルスキー И. М. Майский の回顧録が存在している程度であるが、このマイルスキーの回顧録の第二次大戦を扱った巻 *Воспоминания советского посла ; война 1939-1943*, (Москва, 1965) は、いうまでもなくイギリスでの著者の活動や見聞を語ったものであって、ソ連＝フィンランド関係そのものについてはほとんど史料的にうるところはない。ただ、マイルスキーが1929年から1932年にかけて駐フィンランド公使であった時の回想や、ソ連＝フィンランド戦争当時の英ソ関係とくにマイルスキーによる休戦工作に関して新たな史実が提供されている点で注目される。

フィンランド人以外の人々によって書かれた回顧録で、とくに役に立つものとしては、Wipert von Blücher: *Gesandter zwischen Diktatur und Demokratie* (Wiesbaden, 1951)

がある。ブリュッヘルは、1935年から1944年にいたるまでドイツ公使としてフィンランドに駐在し、ソ連＝フィンランド戦争当時の事情もつぶさに見聞しているわけであるが、かれの回顧録の叙述内容は『ドイツ外交文書集』に含まれた諸史料とほぼ一致している。

2. 研究動向

ソ連邦

ソ連邦の歴史家によるソ連＝フィンランド戦争の叙述についてみるならば、管見のかぎり、この問題を独立の研究テーマとして扱ったものは、モノグラフであれ雑誌掲載の論文であれ、殆んど見当たらない。わずかに、1954年に『コムニスト』誌に載ったソ連＝フィンランド関係に関する一論文 *E. Вознесенский, Взаимное доверие и дружба — основа добрососедских отношений между СССР и Финляндией. «Коммунист» № 17, 1954 г., стр. 85-97* が、ソ連＝フィンランド戦争の前史について、諸史料に立脚した比較的立ち入った分析を行なっているほかには、ソ連邦对外政策史、第二次大戦史、現代史の文献や、フィンランド乃至ソ連＝フィンランド関係を扱った諸種の小冊子の中で行きずりに論じているに過ぎない。しかし、このような状況であることは、われわれがソヴェトの文献にたいして無関心であってよいという理由にはならない。何となれば、ソヴェトの文献においてソ連＝フィンランド戦争のテーマが控え目に扱われている事実自体や、概説書でのその扱われ方の変遷は、ソ連邦における国際関係や現代史の研究のあり方とも深いかかわり合いをもっているからである。そして、このような観点からソヴェト文献にあらわれたソ連＝フィンランド戦争観を整理検討することは、ひいては史実解明のためにも有力な手がかりを提供することになるであろう。

ところで、ソ連＝フィンランド戦争にたいするソ連邦政府の公式見解をもっとも簡明に述べたものとして、この戦争の終了直後の1940年3月29日に外務人民委員モロトフ *B. M. Молотов* が最高ソヴェトで行なった演説があるが、その中でかれは、軍事紛争が生ずるにいたった背景に触れて、次のように述べている。⁽¹⁾

「昨年〔1939年〕の10、11月をつうじてソヴェト政府は、益々燃え上ろうとする国際情勢の現況に鑑みわが国ことにレニングラードの安全を守るうえに絶対に必須かつ緊急とわれわれが考えたところの提案を、フィンランド政府と討議した。これらの交渉は、フィンランド側代表が非友好的な態度をとったために何も実を結ばなかった。事は戦場で決されることとなった」。

「もしフィンランドが外国の影響に屈しなかったならば、もしフィンランドがあれ程ある第三国〔複数になっている——百瀬〕の煽動ののってソ連邦にたいし敵対的態度をとらなかったならば、ソ連邦とフィンランドの間には昨秋平和裡に了解が成り立ち、事は戦争なしに解決されていたであろう、といっても過言ではあるまい。だがソヴェト政府がその要求を最少限に押さえたにもかかわらず、外交的な手段による解決は達成されな

(1) さし当り、Jane Degras ed., *Soviet Documents on Foreign Policy, 1917-1941*, Vol. III (London, 1953), pp. 439-446 を参照。

かったのである」。

「議論の余地のない諸事実が示したのは、昨秋われわれが直面したフィンランド側の敵対政策は偶然のものでなかった、ということである。ソ連邦に敵対する諸勢力は、フィンランドに、わが国それも何よりもレニングラードにたいする作戦基地を準備しており、ひとたび海外情勢がソ連邦に不利となるや、それは、帝国主義的な反ソ勢力およびフィンランドにおけるその同盟者の計画に従った役割を演ずるはずだったのである」。

そして、モロトフは、ソ連＝フィンランド戦争の意義は、赤軍が、このような作戦基地の存在を暴露し、これを粉碎して、「第三国が過去数年間たくらんできたある反ソ計画に止めをさした」ことにある、とするのである。このようなソ連邦側のソ連＝フィンランド戦争観は、基本的にはその後も変ることなく続いた。もっとも、フィンランドの対ソ強硬態度についての説明は、第二次大戦の諸段階に応じて若干変化しており、それが帝国主義列強の反ソ的使喚にもとずくとする点は変らないにしても、大戦の初期の段階においては、「英・仏および他の諸国」の教唆によるものとし、独ソ戦争開始後は、ナチス＝ドイツの名を明示するにいたった。

ところで、以上にみたようなソ連邦側の解釈は、第二次大戦後米ソの対立が激化していくと共に、冷戦宣伝の材料の一つとなり、たとえば1948年にソ連邦情報局が発行したパンフレット『歴史の偽造者』（日本語版の題名）の中では、フィンランドにたいするナチス＝ドイツの影響力が特に強調されていた。そして、ソ連邦の学界においても、こうした政府の見解を支持する主張がなされるにいたった。前にも触れたようにこれらの主張の立証に正面から取組んだ仕事はほとんどないのであるが、例外的にやや詳しく論じている前掲のヴォズネセンスキーの論文を次に紹介することとしよう。

この論文は、第二次大戦中のソ連＝フィンランド関係を回顧したものであるが、かなりの部分が当該問題に充てられている。ヴォズネセンスキーによれば、ソ連邦・フィンランド両国は第二次大戦後善隣関係にあるが、両国の関係の悪かった時代を振り返って、「歴史の偽造」それもとくに「1939—1940年のソ連＝フィンランド戦争に関する史実の悪質な歪曲を批判することが必要である。かれによれば、ソ連＝フィンランド戦争は、フィンランド政府が「国際反動を援けて、フィンランドをさまざまな反ソ的冒険の手段に利用させる政策をとった一例である。すなわち、『第二次大戦の脅威とヒトラー一派の侵略拡大を目前にひかえていたため、ソ連邦政府はフィンランドをソ連邦攻撃の基地として利用しようとする帝国主義者の計画に無関心ではいらなかった』。そこで、ソ連邦政府は1938年春にフィンランドにたいして、ソ連邦の西北国境ならびにフィンランドの安全を保障する相互援助条約を提案したが拒絶され、ついで「1939年10～11月に、ソ連邦の安全保障、とくにレニングラードの安全保障の問題を具体的に検討したい、と提案した」。ところで、フィンランド側使節のパーシキヴィはソ連邦との協定締結の必要を認識していたのであるが、「しかし、協定は、帝国主義列強の反動グループが干渉したため、達成されなかった。……戦争煽動者らは、直ちに、会談を手段をつくして失敗させようとし始め、フィンランド政府にあのような頑迷な態度をとるようにと迫り、フィンランドをソ連邦との紛争に追い込んだ」。11月26日には、カレリア地峡のマイニラ村で砲撃事件がおり、しかも

フィンランド側はソ連邦政府の撤兵要求を拒んで兵力の増強を続けたため、「かかる状況の下で、ソ連邦政府は、レニングラード軍管区の部隊にたいして、ソ連=フィンランド国境とレニングラード市の安全を保障するための手段をとるようという命令を、止むなく下したのである」。

この論文に特徴的なことは、ソ連=フィンランド交渉の過程においてフィンランド側が当初の柔軟な態度から強硬態度に変じたことや、それにはナチス=ドイツや英仏米の資本主義列強の反ソ的な意図から発する干渉があずかっていたという見解を、主にソ連邦以外で刊行された諸文献を材料に立証しようと試みている点であるが、その立証の仕方には多分に強引なものが窺われる。

その中でも、とくに、交渉の途中でパーシクヴィに加えてタンネルが参加することによって、フィンランドの態度が強硬になり、当初の交渉妥結の可能性が失われた、という主張は、タンネルやパーシクヴィ自身の回顧録から立証されず、あまりにもいわゆる右翼社会民主主義者裏切り説に毒されていると思われるし（もっとも、会談にあたってロシア語が用いられ、ロシア語の得意でないタンネルが硬化した印象を与えたということは、タンネル自身も認めているところであるが）、ドイツ公使ブリュッヘルBrücherの親フィンランド的な発言をただちにナチス=ドイツの親フィンランド政策の立証材料とするやり方は首肯できない。ヴォズネセンスキーVoznesenskiyがかかる叙述にあたって典拠としている『ドイツ外交文書集』やブリュッヘルBrücherの回顧録自体が、当時ナチス=ドイツは独ソ不可侵条約の結果、バルト海沿岸にたいする行動の自由を失ない、また東方で事が起るのを望んでおらず、ためにフィンランドへの好意を抱くブリュッヘルBrücherがフィンランドのソ連邦への平和的屈服を望む本国政府の不興を被った事実を提示しているからである。

それでは、その後、ソ連=フィンランド戦争の起源の問題は、ソ連邦の学界ではどのように扱われてきたであろうか。これを、近年盛んになりつつあるソ連邦対外政策史の研究文献についてみることにする。いったいソ連邦の学界においては自国の対外政策史の研究は久しく行なわれず、1950年代後半になってようやくかかるテーマのモノグラフが現われはじめたのであるが、このような初期の文献の一例としての *Ф. Иваши́н, Очерки истории внешней политики СССР (М., 1958)* の叙述は、前記のヴォズネセンスキーの論文に大巾に依拠してなされている。本書の論旨もヴォズネセンスキー論文のそれと同様であり、ソ連=フィンランド交渉を論じた部分では、「フィンランドの代表がユー・パーシクヴィであった会談の初期においては、相互安全保障の強化について条約を結びうる可能性があった。だがこの可能性は帝国主義列強の干渉によって、奮い去られた。ファシスト・ドイツは、公使ブリュッヘルをつうじて、フィンランド政府にたいし、ソ連邦の提案を拒絶するよう要求した。米・英・仏もかかる方向で活動した」と述べて、フィンランドの強硬態度について外部干渉説をとり、その中でもナチス=ドイツの働きかけを強調するような叙述をしている。

次に、もっとも最近出たソ連対外政策史の研究文献としては、ソ連邦科学アカデミー歴史研究所から出した、イヴァーソンIversonも編集者・執筆者の一人として加わっている *История внешней политики СССР, I. 1917-1945 гг. (М., 1966)* がある。この書物は、ソ連邦の

アルヒーフに直接当たっている点でも、また内容構成や議論に新しいものが含まれている点でも、注目すべきものがあるが、ソ連＝フィンランド戦争の叙述の部分にもその傾向が窺われる。すなわち、そこで帝国主義列強による干涉説がとられている点では従来と変りがないが、1938年当時からのソ連邦・フィンランド間の秘密交渉について比較的詳しい叙述がなされている点にみられるように、叙述が具体的できめが細かくなっているばかりでなく、「ソヴェト＝ドイツ条約は、若干の期間、フィンランドにたいするドイツの積極的な活動を拘束した。だが、その〔フィンランドの――百瀬註〕反動的な支配者は、好環境に乗り、ただ社会主義国にたいして戦争を解き放つのでありさえすれば、ドイツの敵対者である英・仏帝国主義者にもその領土や軍事力をゆだねようとした」と述べ、そのあとのところでも、「……英・仏・米の帝国主義グループに反ソ政策を教唆されたフィンランド政府は、これらのソ連邦の提案を拒否し会談を中止したばかりでなく、ソ連邦にたいする戦争へと国の積極的な準備をととのえる道を歩みはじめたのである」と述べて、フィンランドにたいする外部からの干涉にナチス＝ドイツが積極的に参加していたという従来のソ連邦の史学界の定説に、事実上重要な変更をおこなっているのである。

フィンランド

ソ連＝フィンランド戦争が始まると、フィンランド政府は、国際連盟に提訴し、ソ連邦側の非を世界に訴えた。同時に、既述のように、『フィンランド青白書』を發表し、1939年秋のソ連＝フィンランド交渉に関する外交文書の一部を明らかにした。ソ連＝フィンランド戦争は、1940年3月に、フィンランド側が屈伏したかたちで終了し、ソ連邦への領土割譲を規定した休戦条約が結ばれた。しかし、1941年6月には、フィンランドは、ナチス＝ドイツによる対ソ攻撃に巻き込まれ、ふたたびソ連邦との戦争に入り、これは、1944年9月に和を乞い、ようやく終了した。この間に、1939年のソ連＝フィンランド戦争にたいするフィンランド政府の見解および世論一般は、ほとんど変らなかつたといえよう。

しかしながら、第二次大戦後、かかる空気は一変した。フィンランドは、暫時、連合国管理委員会のもとにおかれ、独ソ戦争へのフィンランドの参加責任を追及する裁判が開かれ、また極右団体やソ連邦にとって好ましくないと考えられた団体の解散が行なわれた。そして、フィンランドは、大統領パーシキヴィのもとに、ソ連邦との善隣友好を謳った外交を展開した。このような空気の中で、ソ連＝フィンランド戦争に関しては、戦時中のフィンランド政府の公式見解は引き下げられ、また一般に、その頃のフィンランド政府の態度を弁護する見解は、公けにされなくなった。そして、その一方で、従来のフィンランド外交にたいする批判的見解は、沈黙を破って活発化するにいたった。いったい、これらの批判者は、第二次ソ連＝フィンランド戦争（すなわち、いわゆる「継続戦争」）の後半の時期に、フィンランド国会の内外においてソ連邦との早期休戦を提唱して活動した「平和的反対派」“Fredsoption”に属していた人々を中心としており、そこには保守派から急進的な自由主義者、さらに社会民主党・共産黨員までが含まれていた。大統領パーシキヴィの言動は、こうした人々の中の保守派の発言の例であった。ところで、定期刊行物の論文あるいはパンフレットのかたちで發表されたこれらの人々の見解は、いずれも過去

においてソ連邦・フィンランド両国が確執関係にあったことを遺憾とし、1939年の対ソ交渉においてはフィンランド政府がより柔軟な態度をとるべきであったとする点では共通しているのであるが、当時のフィンランドの国際的地位の具体的な評価をめぐって、とくに当時におけるフィンランドの「中立」の可能性をめぐって、必ずしも意見が一致していない点が注目されよう。

たとえば、フィンランド社会民主党左派の論客として第二次大戦前後の時代に同党機関紙に健筆を振るったアトス・ヴィルタネン Atos Wirtanen は、1945年4月に書かれた「わが中立とわが戦時政策」と題する論評⁽¹⁾の中で、フィンランドが二度にわたってソ連邦との戦争に巻きこまれたのは不可抗力であった、と主張する論者の言を反駁して次のように述べている。「ホルンボレイ博士は、フィンランドの第二次大戦当時の中立維持を不可能なものであったと見做している。……だが、現実果してこの論説どおりであろうか。ドイツ＝ロシア間の紛争の際のフィンランドの地理的位置は、少なくとも、スウェーデンと同じ程度好都合であるとは、主張できないであろうか。そのとおり、主張できる。しかもわれわれには、大戦の勃発の際、少なくともスウェーデンと同程度の備えがあったのである。このスウェーデンなる国は、柔軟でしかも目的性をもった政策によって、ヨーロッパの闘争の圏外に身をまっとうすることに成功した。ホルンボレイは、すでに1938年にロシアが、もし必要とあればドイツの方角からのあり得べき進攻にたいして武力を以てその中立を守る、というむねの保証を〔フィンランドから百瀬補〕得ようと努力していたことを、知るべきである。当時ロシアの要求は、その動機ともども合理的かつ自然であったのであり、決して強欲なものとは受けとれるものではなかった。……もしわれわれが国の中立を決然として守ったならば、ドイツがわが国をその影響下に押しこめる可能性は如何であったのであろうか。その可能性は、非常に少なかったのである。ドイツにたいするわが国の軍事戦略的地位はノルウェーと殆んど同じでありながら、わが国防はその10倍も強大であった。そして、われわれは、必要とするところのあらゆる援助を、まず、技術的、物質的なものを、得られたであらう。だが、ドイツがフィンランドを征服してロシアに向けて進撃する理由がある、と誰か言いでもしたであらうか。答えは明らかに否である。ホルンボレイ博士の主張するところは逆に、われわれには、フィンランドは、大陸列強の間の紛争の際には圏外に立つ可能性を地政学的意味でもつような地位にあるヨーロッパ国家に属している、と思われる。われわれは、それと同じだけの現実主義と客観性と決意を以ってわれわれの可能性を守るかぎり、スウェーデンと同程度に恵まれているのである」。

しかるに一方、フィンランドの政治学者ルウウトウ Y. Ruutu は、ヴィルタネンとほぼ同じ政治的立場に立って1939年秋のフィンランド政府の対ソ政策を批判しながらも、「中立」の可能性の問題についてはかなり異なった論旨を展開している。1945年に刊行されたその啓蒙的な冊子『フィンランドの政治、1939-1944年。フィンランド＝ソ連邦間の戦争は回避可能であったであらうか?』 *Suomen politiikkaa 1939-41. Olisiko sodat Suomen ja Neuvostoliiton välillä voitu välttää?* (Helsinki, 1945) の中で、ルウウトウは、

(1) 1945年4月9日に Arbetarbladet 紙に掲載された“Vår neutralitet och vår krigspolitik”と題する論説。Atos Wirtanen: *Ofärd och gryning* (Helsingfors, 1946) S. 320-323 に所収。

フィンランド政府が、「小規模な領土交換によって大事が避け得られることが明らかであった時に、国の独立を脅かし、数万の若人の生命を危険にさらす」強硬政策をとったことを論難しているのであるが、しかし、その国際情勢観にはきわめて興味深いものがある。「1939年の世界政治情勢とフィンランドの利益」について考察を進めつつ、かれは述べている。「……厳正中立の可能性は、大国が互いに敵対するグループに分れて相互のへだたりを明白にさせてしまっている場合には、小国にとっては、まことに容易なものがある。地理的位置ゆえに、あるものは列強間の戦争の圏外に立ち得るのであるが、その場合といえど、小国は、しばしば、いずれかの大国のグループに傾かざるをえない」。さて、「小国の中立を脅かす最悪の危険は、大国が小国の領土を、戦争活動のために自己に有利なように使用しようとする傾向にある。これが中立問題の核心である。経験が示すように地理的にきわめて遠隔の地にある国々ですら、ノルウェーのように、この理由から、列強の戦争の渦中に巻きこまれたのである。フィンランドの地理的位置は、この点、非常に有利ではあるが、しかし、たとえばノルウェー以上に安全ではない」。そして「……フィンランドは、危険地帯に入ってしまった。フィンランドは、もっとも近いところにある現状満足国に加わるか、それとも不満足強国に加わるか、決定しなければならなかった。どちらの方向が、よりフィンランドを戦争の圏外に止めることとなるかを断案しなければならなかった。フィンランドは、どちらの側にむしろ接近せねばならぬか、決定しなければならなかったのである」。ここでは著者は、とくに1939年夏の英仏ソ交渉におけるフィンランドの共同保障問題について論じているのであるが、それにしても、フィンランドが「中立」の枠内でこれら論者の主張するような行動をとりえたか否か、をめぐって、ヴィルタネンとルウウトウの間に見解の相異が存在することは明らかであろう。そして、ここには、「中立」をそもそもいかなるものとして把えるべきかという、国際関係史ないし国際政治学上の一般的な問題と並んで、当該時期にフィンランドが直面した国際情勢が、いかにみなみならぬ困難をはらむものであったか、が窺われるのである。

ところで、ここに特徴的なことは、第二次大戦後のフィンランドにおける前述のような回顧録や、小冊子・雑誌論文のかたちで発表されたソ連＝フィンランド戦争論の賑わいにもかかわらず、現在にいたるまで、ソ連＝フィンランド戦争の政治史的な側面を扱った本格的な歴史学的研究文献がきわめて少ないことであろう（戦闘の状況を扱った軍事史的研究は多く出ている）。筆者の管見のかぎりでは、Max Jakobson: *Diplomaattien talvisota; Suomi maailmanpolitiikassa 1938-1940* [『冬戦争外交史——世界政治におけるフィンランド1938-1940年』] (Helsinki, 1956) が出ている程度である。この書物は、フィンランドの国会議事録、新聞、回顧録などの広汎な史料に立脚しつつ、ソ連＝フィンランド戦争の前史および戦中におけるフィンランドの対外関係を、欧州全体の国際情勢の発展やフィンランドの内政との関連の中で叙述した労作であり、フィンランドにおける現代史研究の水準を示すものと思われる。その手法は、著者が本来ジャーナリストであっただけに、ある特定の問題を追及するというのではなく、あらゆる側面に触れていこうとする物語り風なものであって、まとまった主張はつかみにくい、全体をつうじて著者が描き出しているのは、ソ連＝フィンランド戦争が正確な判断や計算によってひきおこされたものではな

く、当事国の誤まった情報・恐怖や不信・情勢誤断から生まれた、ということであろう。興味深いのは、ヤコブソンが本書の終章を「無益であったか」(Turhaanko?)と題して、フィンランド軍が無益な戦いをしたのか否か、つまりソ連=フィンランド戦争を回避する余地があったか否かを問うている点である。この点ヤコブソンはきわめて慎重であって、自著の目的は事実の提示にのみ厳密に限定されるところとわっているが、かれの意見によれば、フィンランドがソ連側側の要求を受容すれば戦争は回避されたであろうが、しかし、そのばあい二つの問題がある。第一には、ソ連側側の要求、ことにフィンランド領内(ハンコ Hanko 港)に基地を設定させようという要求は、北欧諸国のグループに加わって無条件中立を守ろうとするフィンランドの基本方針と矛盾した。第二に、そのような要求を受容したばあい、ソ連側の勢力圏内に入ってしかも自己の独立を維持しえたか、という問題がある。しかし、かかるばあいのソ連側の対フィンランド政策は不動ではありえず、独ソ関係のような外的条件によって変動するはずであるから、「アレクサンドルの次にポブリコフがきた」故事に照しても、この設問に肯定的に答えることはできない。このように論じたのちに、結局ヤコブソンは、ソ連=フィンランド関係がチェスのゲームのように正確な計算可能なものでなかった以上、フィンランド人が独立と民族的自由を守るために抵抗した点は評価されるべきだと、主張しているようである。なお、本書の英語版として Max Jakobson: *The Diplomacy of the Winter War; An Account of the Russo-Finnish Conflict, 1939-1940* (Cambridge, Massachusetts, 1961) があるが、内政面をはじめとして多くの削除がなされ、また新たに説明的に書き加えられた部分があって、原書とかなり異なったものになっている。

西欧諸国

ソ連=フィンランド戦争は、西欧世界に、二重の意味で、広くかつ深い影響を及ぼしたということができる。すなわち、まず第一に、当時において、西欧における反ソ感情の高まりを背景に、フィンランド援助計画が樹てられ、英仏とソ連との軍事的衝突の可能性すら生じたのであった。折しも英仏はナチス=ドイツとの戦争に入っており、このフィンランド援助問題の発展如何によっては、第二次大戦の成行きそのものすら左右しかねない事態が生じたのであった。第二に、より長期にわたる影響として、西欧世界に、ソ連にたいする深い不信感を植えつけた点を挙げるのであろう。この対ソ不信感は、第二次大戦後には、ソ連=フィンランド戦争を、「ソ連帝国主義」の好例として、冷戦宣伝の恰好の材料とするにいたったのである。このように、西欧世界において抱かれるソ連=フィンランド戦争観は、ソヴェト政権成立以来のいわゆる「二つの世界の対立」ないし「冷戦」状況と深くからみあいつつ、存在し、あるいは変遷してきたといえるであろう。

西欧諸国においてあらわれたソ連=フィンランド戦争に関する文献を検討するにあたっては、まず、この戦争が戦われていた当時すでに現われた時事解説的な出版物を取り上げる必要がある。ソ連=フィンランド戦争が始まると、西欧諸国から数多くのジャーナリスト、政治家、労組代表などがフィンランドを訪れ、帰国後その印象記を発表した。かれらのフィンランド訪問は、いうまでもなく、ソ連=フィンランド戦争が西欧世界にとって

いかに大きな関心のまもであったかを示すものであるが、そのような関心の底には、単に「勇敢な小国フィンランド」にたいする同情ばかりでなく、ソ連邦にたいする反情や、ナチス＝ドイツを容易に粉砕しえないことへの挫折感、さらには独ソ不可侵条約以来のソ連邦の行動にたいする西欧の社会主義者の失望と憤激などのさまざまな要因が入り混っていたと思われる。

これらの出版物をつうじて窺われるもっとも特徴的な事柄は、西欧の当時の進歩的な人々がソ連＝フィンランド戦争にたいして抱いた異常なまでの関心であろう。その一例として挙げるができるのは、イギリスのジャーナリストの筆になる John Langdon-Davies : *Finland ; The First Total War* (London, 1940) である。著者は第二次大戦前史の重要な一局面をなすスペイン戦争に従軍して *Behind the Spanish Barricades* なるルポルタージュを書いているが、ソ連＝フィンランド戦争が勃発するとフィンランドに赴き、前線も視察して、この報告を書いたのであった。この書物は、しかし、戦闘についての単なる記録ではなく、そもそもソ連＝フィンランド戦争をいかに見るべきか、という問題にまで立ち入って論じている。著者は「スペインにたいする〔独伊の——百瀬補〕侵略に反対して私と一緒に仕事をした人々が〔ソ連邦によるフィンランド侵略の事柄となると——百瀬補〕今や耳目を覆っていることに淋しさを感じた」と同時に、バルセロナやゲルニカから聞えてくる苦悶の叫びに耳を籍そうとしなかったフランコ支持者が「勇敢な小国フィンランドのために人情というミルクを泡立てている」ことに怒りを感じてルポルタージュの旅を思いだしたのであるが、現地での取材を終えたかれは、ソ連邦の指導者のフィンランドにたいする行動を非難しながらも、西欧諸国もまた、事態がここにいたるまえにエチオピアやスペインやチェコスロヴァキアの侵略に手を貸した意味で（それがソ連をして猜疑心に満ちた行動に走らせることになったのであるから）、フィンランドの事件にたいして連帯責任をもつと考へ、結局フィンランド国民が一体となって絶望的な戦いを続けているのは、「文明世界にたいするジェスチュア」であり、ナチス＝ドイツとの戦いを控えたイギリスにとって教訓的な意味をもつ、と結んだのであった。

このような中で、ペンギン・ブックスの叢書のうえで、共産主義から転向した知識人ルイス・フィッシャー Louis Fischer と当時共産主義に接近しつつあったイギリス労働党左派の下院議員 D. N. プリット D. N. Pritt との間に、ソ連＝フィンランド戦争の解釈をめぐるはげしい論戦が行なわれた。プリットは *Must the War Spread?* (London, 1939) を同叢書の一冊として書き、その中で、フィンランドが当時の国際情勢の中で資本主義諸国間の反ソ十字軍の尖兵としての役割を果しつつあるというテーゼのもとに、ソ連邦の弁護論を試みており、これにたいしてフィッシャーは、*Stalin and Hitler* (London, 1940) を書いて、独ソ不可侵条約以来のスターリンの対外政策は権力欲にとりつかれた膨脹政策であり、内政面における粛清と対応して、ソヴェト社会の変質を示すものであると、主張している。これらの論争はソ連＝フィンランド戦争の見方をめぐるものでありながら、実は1939年9月以来イギリスがドイツにたいして行なっている戦争をいかに評価するかという、イギリスないし西欧諸国自体の問題に基本的に関連していたのである。

さて、ソ連＝フィンランド戦争の終了後、フィンランドの問題は、第二次大戦の本格化、

規模の拡大とともに次第に西欧諸国国民の関心から遠ざかり、ソ連＝フィンランド戦争ないしフィンランドの諸問題を扱った文献もほとんど見られなくなった。あまつさえ、フィンランドがナチス＝ドイツの陣営の側に立ってソ連邦と戦うにいたったことは、西欧諸国国民のフィンランドにたいする同情心をいちじるしく薄めたのであった。ところが、このような空気は、第二次大戦後変化しはじめ、ソ連＝フィンランド戦争の記憶はふたたび人々の脳裡に上るようになった。第二次大戦後米ソ間ないし「二つの世界」の間によく激化した「冷戦」状況の中で、1939年のソ連＝フィンランド戦争は、「ソヴェト帝国主義」の好例として、冷戦宣伝の格好の材料とされるにいたったのである。そして、このような発想の文脈の中でソ連＝フィンランド戦争を扱った文献も、ことにアメリカにおいて現われたのであり、その一例としては、E. Day Carman: *Soviet Imperialism ; Russia's Drive toward World Domination* (Washington, D. C., 1950) を挙げるができる。

このような雰囲気の中で、1948年にさきに挙げた、アメリカのフィンランド史の専門家ヴオリネンの編集した *Finland and World War II, 1939-1944* が刊行された。この書物の内容は、大戦中のフィンランド政府が、何よりも戦争の回避を望み、すべての国にたいする友好・中立政策をとったことが力説され、それにもかかわらず、ソ連邦によるフィンランドの独立にたいする脅威に直面していかに対ソ自衛戦争に巻き込まれていかざるをえなかったかが、説かれているのであるが、編者のヴオリネンはこの見解に賛成しており、この書物は、当時の西欧学界においては、第二次大戦中のフィンランドを扱ったもっとも権威あるものと見做されたのであった。ヴオリネンは、そのごもフィンランドないし北歐事情についてしばしば論説を発表してきたが、1965年に *A History of Finland* (New York, 1965) を世に問うた。この書物は過去30年にわたる著者のフィンランド史研究の蓄積を圧縮した概説書であって、ソ連＝フィンランド戦争には十数頁をさいているに過ぎないが、しかし、かれがこの部分の叙述にいかに関心を以て当ったかは、序文でこの部分を材料にしてフィンランド史叙述の問題点を論じていることから窺われよう。そこではヴオリネンは、現代史研究者が直面する史料上の制約(アルヒーフの未公開等)を認めながらも、フィンランドの作家の幾人かが、史料がそろわないかぎりソ連＝フィンランド戦争の背景に関して断案は下し難い、といった「不決断な」態度をとっている⁽¹⁾のを非難して、「1939年以前のフィンランドの対外政策およびソヴェト軍事行動が同国に戦争を強制したのちのフィンランドの地位に関する諸事実は、歴史家にとって格別の難題をなすものではない。……歴史家は時の経過がやがて『より確固とした』眺望をもたらしてくれるまで待つなどという必要はない。肝心なのは自分が眺望をもつことで、歴史家はただそれを用いさえすればよい」とし、「私はそれを用いることをためらわなかった。……〔それを用いた結果がソ連＝フィンランド戦争を叙述した部分である、という趣旨の説明をしたのち——百瀬註〕……ことフィンランドに関するかぎり、証拠から否応なく出てくる結論は、ただひとつソ連邦という項目だけが書き込まれた1939年の侵略貸借対照表である」と断じている。このように、あらゆる曖昧な評価を退けてソ連邦の対フィンランド政策を

(1) ここで Wuorinen が具体的に誰を指しているのか不明であるが、恐らく、第二次大戦後の前述のようなフィンランド論壇での動向を指しているであろう。

断罪するヴオリネンの態度は、1948年に前掲書を編集した当時から一貫しているのである。

一方、ここに注目すべきことは、1950年代半ばにいたって、フィンランドで戦後出現した史料に立脚した研究がアメリカでいくつか現われ、しかもそれらが、いずれも、従来欧米で定説とされてきたところの、そして前記のヴオリネンにみられるようないわば古典的なソ連=フィンランド戦争観の訂正ないし再解釈をこころみたことであろう。Albin T. Anderson: “Origins of the Winter War; A Study of Russo-Finnish Diplomacy,” *World Politics*, Vol. VI, No. 2 (Jan., 1954); Anatole G. Mazour: *Finland between East and West* (New Jersey, 1956); Leonard C. Lundin: *Finland in the Second World War* (Indiana, Bloomington, 1957) がそれである。これらのうちで、アンダスンのものは、先駆的な仕事であり、手堅い実証的な手法でソ連=フィンランド戦争に先立つ両国間の交渉を跡づけているが、ソ連側の意図が基本的には自国の安全保障確保に限定されたものであり、交渉決裂後はじめてフィンランド自体の征服という目的に変化したものであると指摘する一方、外交交渉段階においてフィンランド側が直面したものは「ステーツマンシップの真の試煉」であり、情緒的な世論に乗ったフィンランド政府の硬直した態度は、小国としての周到さに欠けるところがあった、と論じており、当時としては異色の結論を出したのではないかと考えられる。マズーアのものは、第二次大戦後にいたるフィンランドの政治史をその国際的地位に重点をおきつつ扱った概説であるが、第二次大戦の部分に大きな関心が払われており、ここに特に取上げるに値する。もっともマズーアの本来の専門はロシア史であり、その点フィンランド史の本来の研究者には不満な点もあると思われるが、われわれにとって興味深いのは、むしろ、かれがフィンランドの政治史を研究テーマにとりあげた際の問題意識であろう。本書のまえがきの中でマズーアは「二つの世界の対立」というすぐれて同時代的な関心から話題を説きおこし、そこからアメリカ人がフィンランド史に関心をもつことの必要性をひき出している。マズーアによれば、第二次大戦後の世界の分極化の過程において、世界の国々は一般に、東西いずれの世界へ帰属するかという選択を迫られたのであるが、フィンランドのばあい、事情は異なっていた。フィンランドが迫られたのは、「共存か破滅か」“Coexistence or No World”の選択であり、それは既に選択の問題ではなくてフィンランドの「生きるすべ」“Way of Life”にかかわる事柄ですらあった。このような観点に立ちつつマズーアは、フィンランドが、数世紀にわたる「東方の隣人」ロシアとの「共存」をつうじて、「西側世界が〔今〕ようやく学びはじめたこと——二つの世界に生きるすべ」を学びとってきた経緯を概観しているのである。第一次大戦末期の独立後、内戦の時代を経て、フィンランドは、以来、国内における民主的改革の徹底化と、対外面での善隣政策によってソ連邦との共存をはかることを国是としてきたのであるが、そのような国是が実現するか否かは、「国際社会で法が尊重されるか、それともジャングルの掟が生きる道とされるか」という外的条件如何にかかっているとされている。第二次大戦中のフィンランドの体験は、このような文脈の中で説明されるわけであるが、ソ連=フィンランド戦争を扱った部分では、フィンランド側の柔軟性の発揮が事態の悪化を救いえたのではないかと疑問を表明して、アンダスンと

ほぼ同様の見解を述べている。

次に、『第二次大戦におけるフィンランド』というテーマを正面に据えてモノグラフを書いているのは、バルト海沿岸諸民族史の専門家ルンディンである。ルンディン自身、この研究が史料出現の過渡的な段階において成ったものであり、その意図も問題提起を越えるものでないことを認めているのであるが、第二次大戦におけるフィンランドの対外関係を全局面にわたって扱っており、しかも当時の段階において出現していた諸史料をつき合せて文献批判を行なっている点でも、本格的な研究の名に値するものであった。ルンディンは、二つの大きな前提から出発している。第一に、当時においてはもはや、「冷戦の重みのゆえに没却されがち」であった1930年代の政治的雰囲気、すなわち、ローマ＝ベルリン枢軸の存在がヨーロッパ諸国を内と外から脅かしていた事実が想起されるべきであり、第二に、20世紀においては、小国は、破滅を避けるためには、対外関係の分野で大きな英知を働かさねばならないが、とくに、強国と隣接した小国の政治指導者は、隣国の犠牲においてまかなわれるような一切の膨脹欲を放棄すべきのみならず、とくに国際緊張の時期においては、隣国の安全を脅威するような一切の外貌を避けなければならない。以上の前提に立ちながら、ルンディンは、ソ連＝フィンランド戦争の部分については、次のような研究課題を設定している。すなわち、戦前のフィンランドが国際関係において「善良な国家」“Virtuous State”であった事実は疑う余地がないが、しかし、ソ連邦の眼にも「善良」に映るように常に注意を払ったか否か、と。そして、これにたいしてルンディンは、結局、戦前のフィンランドにおける反ソ・親独勢力としての右翼運動の存在がソ連邦側に不安感を抱かしめていたにもかかわらず、フィンランド政府がとった態度は、かかるソ連邦側の疑惑をとらえて一掃するような性質のものでなかったと指摘し、対ソ交渉におけるフィンランドの強硬態度ともあいまって、フィンランド側に一流のステーツマンシップが欠けていたと論ずるのである。もっとも、ルンディンは、ソ連邦政府の態度についても批判的なのであって、ソ連＝フィンランド戦争の時期のみならず、かれの研究対象である第二次大戦中の全時期をつうじて、その「愚かさ」“Stupidness”を指摘している。そして、ソ連＝フィンランド戦争前史については、ルンディンは、フィンランド内外の情勢からしてソ連邦側の要求内容そのものには理を認める（“not without reason”という表現を用いている）のであるが、ただしその際に、ソ連邦側が、フィンランドを「過誤もおかず人間によって統治されている国」としては取扱わず、「その国際政策がもともと東方の隣国にたいする悪意に発している国」と見做したところに誤りがあった、と述べているのである。結局、ルンディンは、その著の終章において、展望を第二次大戦後の世界にまでのばし、ソ連邦＝フィンランド両国の友好関係は、第二次大戦をつうじてそれぞれの側がえた教訓がいかに生かされていくかにかかっている、と結んでいる。

ソ連＝フィンランド戦争にたいするこれらの新解釈は、英米におけるフィンランド研究の権威とされている人々の間で、意外に不評であった。まず、さきに触れたヴォリネンは、マズーアの書物の書評⁽¹⁾において「東西間の」フィンランドという著者の発想そのものを

(1) *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 309 (Jan., 1957), 196-197 に掲載。

否定して、フィンランドと北欧諸国との親近性を強調するとともに、細部の批判においては、ソ連=フィンランド交渉の際にフィンランド側がマズーアのいうような「より慎重でより政治家的手腕に富んだ」政策をとったとしても、それが果してフィンランドの独立を保障することとなったか否か疑問であるとしている。またルンディンを批判したイギリスのフィンランド農業問題の専門家ミード W. R. Mead⁽¹⁾も、ほぼ同様の観点に立っているが、興味深いことは、かれがルンディンの研究は、「この辺境の国 [フィンランド] を扱った出版物には稀な detachment を特徴とする」と紹介し、こうした見解の書物をフィンランドで翻訳出版する勇氣があるか、と皮肉り⁽²⁾ 「ルンディン教授が採用した新世界的自由主義の観点 (the liberal New World point of view) は、そのままではフィンランド人に殆んど何の影響も与えない代物である」と結んでいることであろう。たしかに、マズーアの書物は、ロシア史の専門家によって書かれたものであって、フィンランド史そのものに関しては事情に明るくない面や「思いつき」的な発想も窺われ、またルンディンの書物が、物事をアメリカ的な民主主義観によって割り切りすぎている印象は否定できない。しかしながら、われわれの関心に価すべきは、最近、フィンランド近代史を専攻するアメリカの比較的若手の研究者のあいだに、ヴォリネンらの見解にたいして、むしろ批判的な傾向が窺われることであろう。たとえば、ヴォリネンの『フィンランド史』を書評したホジソン John H. Hodgson⁽³⁾ は、著者が、「三名の重要人物——グスタフ・マンネルヘイム、J. K. パーシキヴィ、ヴァイノ・タンネル——が、周囲の流れに抵抗し、フィンランド政府に、主な領土上の譲歩によってソ連邦の安全保障要求を満足させることの必要さを納得させようと企てて失敗した」事実を無視し、「完全とはいわないまでも、正確な構図を提供していない」と指摘している。しかも、注目すべきは、ホジソンのヴォリネン批判が、フィンランド近代史にたいするより根本的な観点の相違にまでつながっていることであろう。第二次大戦後のフィンランドにおいては、1918年のフィンランドにおける赤衛軍と白衛軍の闘争を「ソヴェト・ロシアからの解放戦争」「Vapaussota」と見做す兩大戦間期の見方にたいして、これを「国内戦争」「Kansalaissota」と再解釈する学説が有力となったが、ホジソンはヴォリネンが事実にもとづかない前者の観点に立っている、と酷評している。ここには、ソ連=フィンランド戦争の評価をめぐる、フィンランド近代史の解釈の根本的な相違にまでつらなる二つの流れの対立が窺われるように思われる。

(1) *Slavonic and East European Review*, Vol. XXXVI, No. 87 (June, 1958), 545-546 に掲載。

(2) なお、この Lundin の書物は、そのごフィン訳され、Charles Leonard Lundin: *Suomi toisessa maailmansodassa*, Jyväskylä, 1961 としてフィンランドで出版された。この書物は英語版を出版後渡芬した Lundin が新たに接しえた諸文献に立脚して改訂・増補されているが、趣旨は変っていない。なおこのフィン語版の序文の中で Lundin は「外国人」がかかる研究を発表する理由を説明し、「フィンランド人にかれら自身の事柄について語ってきかせようとするため」ではなく、「フィンランドの近年の歴史上・政治上のいくつかの難問題を、事情にうとい外国人に向って提起する」(圏点引用者) ことが目的であるという、示唆的な言葉を述べている。

(3) *Slavic Review*, Vol. XXV, No. 1 (March, 1966), 161-162 に掲載。

〔附記〕 本稿は筆者のフィンランド留学前に執筆されたものであり、その後筆者は当時未見であったいくつかの文献に接することをえた。たとえば本稿の内容に直接関連するもののみに限っても、基本史料としてはフィンランドの元首相キヴィマキ T. M. Kivimäki (1932年12月—1936年10月在任) の回顧録 *Suomalaisen Poliitikon Muistelmat* (—フィンランド政治家の回顧録), Helsinki, 1965 がソ連=フィンランド戦争の背景的事実に関して若干触れるところがあり、また研究文献としては、*Itsenäisen Suomen ulkopoliitikan alkutaival* (独立フィンランドの初期対外政策の歩み), Helsinki, 1962 所収の L. A. Puntila : “Suurvaltapoliitikan pyörteissä talvisotaan (冬戦争に至る迄の列強政治の渦流の中で)” ほかの諸論文、Tuure Junnila : *Suomen taistelu turvallisuudesta ja Puolueettomuudesta* (安全保障と中立のためのフィンランドのたたかい), Helsinki, 1964, Kullervo Killinen : *Puolueettomuuden miekka ; Suomen puolustuskysymyksen tarkastelu* (中立の剣 — フィンランド中立問題の批判的検討—), Helsinki, 1964, Tuomo Polvinen : “Suomi toisessa maailmansodassa (第二次大戦におけるフィンランド)”, *Suomen ulkopoliitikan Kehityslinjat 1809–1966* (フィンランド対外政策の発展進路), Helsinki, 1966 所収などが、それぞれ部分的にはあるが同戦争の起源に触れている。また、小冊子ではあるが、フィンランドの共産主義女流作家で大戦中のソ連=フィンランド関係に特殊な役割を演じた Hella Vuolijoki が行なった講演 *Luottamukselliset neuvottelut ; Suomen ja Neuvostoliiton välillä 1938–39–40–41* (フィンランド・ソ連間の秘密会談), Helsinki, 1945 も興味深い史料であろう。一方、ソ連の出版物についてみれば、ソ連=フィンランド戦争の起源に関しては従来ソ連側が軍事紛争の直接原因としてきた「マイニラ砲撃事件」への言及がみられなくなってきていることが特徴であり (例えば、*И. Роздожный, В. Федоров ; Финляндия — наш северный сосед*, Москва, 1966, стр. 33), とくに、1966年9月22日附のフィンランドの新聞“Uusi Suomi” 特派員記事の伝えるところによれば、最近モスクワで刊行された大祖国戦争小史は対フィンランド戦に当ってスターリンがおかした軍事戦略的誤謬の事実を認めたといわれる。以上筆者が新たに接しえた諸文献については他日の機会に論ずることとせざるをえないが、それにもかかわらず、目下のところ本稿の輪郭そのものを改める必要は感じていない。(1966年11月、ヘルシンキにて記す)

The Winter War and the Historians

Hiroshi MOMOSE

When a historian wishes to come to grips with an event of international character, the work calls first of all for his own panoramic view of the voluminous literature coming from different countries concerned. In an attempt to secure a base of operations for his research work on the origin of the Winter War of 1939-40, the writer juxtaposes and discusses various interpretations presented by Finnish, Soviet and American historians. The writer hopes that this short bibliographical essay will serve as a guide for Japanese readers who have relatively been little informed for their apparent interest in the problem.